

附設高等学校

創立二十五周年記念誌発刊に際して

校長 原 巳 冬

本校は昭和二十五年四月に創設され、久留米大学御井学舎構内に、旧軍施設を改装して開校された。敗戦による国家窮乏の難局下にあつて、本校が創設されたのは次のような事情によるものであつた。我国は新生日本として、平和的・文化的・民主主義国家建設を国是として、再生の道を求め、教育改革を断行し、六・三・三・四の新しい教育制度を確立した。之に応じて、久留米医科大学は医学部、商学部からなる総合大学として、且つ、小学校から大学に及ぶ一大学園建設を志向し、その第一着手として附設高等学校の創設をみたのであつた。久留米大学のこの総合学園の構想は、本学の所在地である久留米市が、終戦前、第十八師団司令部所在地としての軍都から、文化教育都市への更生を図ろうとしたことに即して、地域社会への協力貢献を志したことによるものでもあつた。しかしながら、本校創立の純乎たる教育的理由は、敗戦による我国の当時の思想的混乱、無秩序な状態に対して、子弟の正しい徳性の涵養をはかり、青少年向学の志気を集め、わが国家・社会に貢献しようとする、誠実にして気概ある人物を育成しなければならないという、教育的使命の自覚であり、当時の小野寺直助学長先生、本校初代校長板垣政参先生らの、止むにやまれぬ救国の赤心の発露であつたと拝察されるのである。即ち、本校の校是を「国家・社会に貢献しうる誠実にして気概ある人物の育成」と定められ、この「国家・社会に貢献しようとする、為他の気概をもった、誠実・努力の人物の育成」こそが、本校教育精神の真髄として、この学校は創設され、本校将来への滔々たる大河の源流となつたのであつた。

初代校長板垣政参先生、副校長として、初代校長に長く御協力になり、第二代校長をお勤めになつた檜崎広之助先生の本校経営の方針は、この校是を貫き実現する為に、生徒は少数定員、即ち一学年三学級編成とし、且つ男子のみの学校とさ

れた。教師には真に指導力を有し、しかも、身を以つて、誠実・努力の範を示しうる人物を得ることを念願して本校の教育を組織された。

初代校長・第二代校長にいたる本校草創期の教育は、実にその基礎を培い、強固にすることに着実な努力を積まれた時代であつた。まことに、深耕・深固の時代であつた。本校専任の教師は少く、大学医学部予科の廃止による教授力の余裕を活用し、純真にして向学心に燃ゆる本校初期の生徒を、高い学術的雰囲気の中で励まし指導された。

思うに教育のことは、教師の深い学殖、造詣と、高い豊かな人格、徳性によつて、向学心の厚い青少年が更に煥発されながら、いわゆる深耕・深固のわざを成就することにある。中国の古人は「根抵深固、柯葉暢達」の語をのこしている。深く耕す教師、深く耕す生徒、深く堅固に根を張り、枝葉鬱然たる教師、深く根を伸ばし、堅固に根を張り、地上の莖葉をうるわしく伸展させていく若者、本校草創期十年の年月は、先生方の誠実なご努力、誘掖と、純真にして向学心に燃える生徒諸君の本校修学の生活は、正に深耕・深固への日々であつた。本校の今日あるは、正しくこの時代の深固のわざに由来するものと感謝しなければならぬ。

第三代校長大内党之助先生は昭和三十六年七月に着任されたが、本校教育に於て、深耕・深固のわざを更に推進し、本校に学ぶすべての生徒を夫々に、皆その志を遂げさせるにはどうすべきか、この一事に邁進された。先生は旧制福岡高等学校に長く英語科の教授として、多くの俊秀を指導され、また本県高校の名門、修猷館高校長等を歴任され、教育に於ける深耕・深固のわざの何たるかを、よく体認された方であつた。即ち本校に於て、之を更に深く具体化する方法を熱心に探求され、全職員挙げて努力研究の日々を積まれた。成績区分による学級編成等を中止されたのもこの時代であつた。安易に取組めば平坦々の道も、到達地を高く望む求道の人には悪戦苦闘の道となる。しかしながらその努力、誠意は必ず酬いられるものである。昭和四十年三月の大学進学成績に如実にそれを実現されたのであつた。惜しむべし、憾むべし、学校長は全年三月十五日、九州大学の入試合格発表の夜、忽焉として御逝去なされたのであつた。

第四代原巳冬校長は昭和四十年六月に着任した。福岡県公立高等学校の状況をよく知っている校長としては、本校の教師・生徒間に見られる教育実践は誠に稀有にして尊敬すべきものであると感銘した。しかしながら、教育施設の上からの制約は如何ともすべからざるものがあり、本校教育施設、環境の整備、改善は急を要するものであることを痛感した。然るに、

着任一ヶ月後の七月末に行われた法人理事会に於て、当日、東京から御出席になり、会議を主宰された理事長石橋正二郎先生は、予定の議事審議が終了した時、重大な御提案をなされた。「さて皆さん、附設高校も校長がみえたので、学校移転をしようではありませんか、土地は私が上げます。正源寺の山を上げますので、皆さんどうぞ御協力下さい。」とご提案下さった。理事会は大きな感謝をもってこの御提案を了承し、附設高校の学校移転・校舎新築のことは一決した。実にわが附設高校の最高に幸せの日であった。心魂打ふるう感激の日であった。この朗報は附設高校の教育に鮮新な息吹きを促した。私共は直ちに学校移転の構想を練り、又、新校地、校舎に於ける新施設の中で行われる本校教育についての準備にも取り掛かった。独立校地、校舎に於ける学校教育の状況は、従来のそれとは大いに趣きを異にするものがある。生徒の日々の学校生活は、放課後のクラブ活動の如きは殆んど不可能であったから、生徒らは放課となれば、殆んどが直ぐに下校した。独立の校地に、整備された校舎となれば、生徒の学校生活には自主的・創造的活動が活発に出来るようになる。図書館も、大学図書館の恩恵にあづかっているが、本校独自の図書館活動が出来る日が待望されることになった。全年八月十日に、学校長が作成した校舎建築の草案を持って、大学の古賀良彦学長先生、根城晝夜専務理事先生方と上京して、石橋理事長先生にお目につけた。この案は、第一棟本館普通教室棟、第二棟特別教室棟、この棟に図書館・視聴覚教室等を付設した。第三棟体育館兼講堂、之に並んで武道場、という構想であった。理事長先生は、これはい、案です、が、この西の方は少し道路に詰りすぎていると仰っしゃって、鉛筆で訂正して下さい。爾来二年の歳月を経て、昭和四十三年七月二十日、待望の日が訪れた。当初の案よりはずっと縮小されたものになったが、校舎面積は元の二倍、校地は五倍の豊かな施設の新校地、校舎に愈々移転の日が来た。全校職員、生徒で移転作業を終了した翌日、開校以来、霜華十八年、嘗々として生徒指導に献身努力された先生達、孜々として勉学に誠実、努力を重ねて来た生徒達、今やこの古き校舎に別れを告げる日が到来した。

新校地、校舎への移転は、本校の歴史に於て一時代を画するエヴェントであった。この朝、吾々は、この地、この校舎、吾らが附設と呼びなして来たこの学校に於て、吾々が畏敬する先師、先輩各位、生徒らが敬愛する先輩らが、こゝに学び、こゝに夢み、こゝに親しく語り合った想い出の学舎に別れを告げる離別の式を行った。

次の詩は、この離別の式で校長が旧校舎に捧げたものである。かの旧校舎は板垣先生をはじめ、多くの先生方のお心、お言葉をよく覚えていた。卒業生のこと、今の生徒らのこと、その真実を私に語ってくれた。ある冬の朝、いつになくおこそ

かに語ってくれた言葉を私は忘れることは出来ない。それは我が附設高校のいのちの真髄である故に、又それは学道に精進した先人達の言葉でもあったゆえに、私はこゝに、かの母なる校舎が語ってくれた赤心の片々を記しておき度い。

あなたは、私が初めて訪れた日、よく来て下さった、心から歓迎しますとやさしかった。私は古い校舎ゆえ、夏は生徒達暑いでしよう。雨の日は暗いでしょうと語った。廊下の床板が破れた時、すみませんと嘆いた。秋の体育大会の日、役員達が忙しく入ったり出たりした。い、とも、い、とも、気をつけて、どんどん走りなさい、とも云った。こんなに古い校舎なのに、と旅人が云って去った日、あなたは誇らしげであった。冬のある寒い朝、あなたはいつになくおこそかに云った、生徒達が励むところに学校はあるのです、と。春風にさそわれて桜が咲き、五月の空の下に棟（おうち）がみやびた花をばいに装おい、藤棚のきれいな花房がさめいた。棟の伸び広がった樹かげで、よく全校集会があった。その幹や枝が切り落された日、夜が更けても、あなたは一言も語らなかつた。先生も一緒に床板にタワシをかけてきれいに下さった日、あなたは心から有難うと云った。

吾々が去っていく日、私共はかの校舎を慰める言葉を知らなかつた。先生の代表も、生徒の代表も、心から感謝の言葉を述べた。やがて何もかも、草がそれを隠し、雨が消し去る日が来るであらう。けれども吾々は、かの校舎が語ってくれた、附設の心、「生徒らが励むところ」に学校はあるのです。この言葉を忘れてはならない。古人も云った如く、堂塔伽藍が道場ではない、「直心これ道場なり」正直に、ひたむきに、学ぶ心が道場であるという。学校施設の完備はもとより大切であるが、そこに学ぶ者に、向上学道の心が弱ければ何んにもならぬのである。本校は将来、施設・設備は益々完備へと進むであろうが、最も大切なことは、全校生徒の旺盛な向上研学の精神である。この心を逞しく、生き生きと育て、ゆかねばならない。

吾が附設高校の学校移転については、この全国的にも比類稀な校地をご寄贈いただき、この学校移転を成就させていただいた、石橋正二郎先生の御鴻恩を決して忘却してはならない。石橋理事長先生は昭和五十一年九月十一日に、本校の成長をおよろごび戴きながら御逝去なされたが、このことは永く語り伝うべきことである。又、かの古い校舎で、板垣校長先生はじめ、先師、先輩各位が、困窮、不備、不便の中に御精進いたゞいた、高邁不屈のご精神、ご努力に対して、後輩吾らは大いにお酬いしなければならぬと思うのである。

附設中学校は昭和四十四年四月に設立された。時、恰も我が国では、中学校卒業生の八十数パーセントが高等学校へ進学

する事態に應じて、中学・高校を一貫する教育についての検討が国を挙げて行われる状況となった。わが久留米大学では、高等学校創設当初から総合学園への構想があり、本校としては、中学・高校一貫教育については久しく検討して来た問題で、新校舎建設に当って、六学級の教室を増設することが出来たので、愈々附設中学校設立の構想を固めたのであった。中学校新設については、板垣、檜崎両先生の御意見は、等しく、高校への信頼による志望の切なる生徒の入学を得なければ、六年間の教育は大きな負担となるであろう、ということであった。吾々の考えとしては、中学生は家庭からの通学が望ましいとして、本校から三十軒以内の地域から、修学志望の堅確な生徒を毎年九十名内外、集め得るかにあったが、結論としては成算を得た。第一回生は一学級、四十五名を試みに入学させたが、全生徒自宅通学生であった。本校の大学進学の実績が逐年上昇するに従って、中学校への志願者数が増加して、その地域も次第に拡大し、入寮希望者数が増加していった。昭和五十年三月、附設中学校第一回生が高校を卒業するに及んで、大学進学の実況が一新した。東大三〇名、京大九名、九大五八名という成績は、高校、中学を通じて、遠隔地からの入学生の増加を招来して、学校移転の際は寮生は四〇名内外であったが、今日では、中学生は新入生の五〇パーセント、高校生は七〇パーセントが通学不能、入寮希望生である。従って、昭和四十六年に一五〇名第一棟、四十八年に一〇〇名第二棟を建設し、五二年度中に一五〇名第三棟を建設する。しかも現在、校外に分寮を四棟保有し約一〇〇名の生徒が寮生活を行っている。将来は、中学生五〇パーセント、高校生六〇パーセントの入寮者を以って入寮生の制限を行うべきであろう。

本校教育の将来については、軽々には予断を許されぬと思うが、本校創立時に確立された教育の方針をあくまで堅持して、誠実、努力の人にして為他の気概ある人物の育成につとむべきである。この校風を慕って本校に入学を志望する者は、許される限り迎え入れて、その志望を達成さすべきであろう。幕末の時代に、わが郷土の大河、筑後川の上流、日田の地に、広瀬淡窓先生の咸宜園塾があった。この塾には、交通、音信不便の時代の時代にもか、わらず、塾生は全国から集った。入門簿に見らる、塾生の生国は、大隅、隠岐、下野の三ヶ国を除く六十五ヶ国から集っている。我々はこの事実の本質を見あやまってはならない。我々は我国青少年の、この好學向上の意欲、素志を尊重し、之を枯渇させるようなことがあつてはならないと思う。

今回、時の恵みを得て、本校創立二十五周年式典並びに記念行事を行うことが出来るのは洵に幸せである。本校は前に記

したように、昭和四十三年に学校移転、校舎新築が行われた。校舎建築、設備の充実については、父兄後援会、特に歴代会長先生、当時の丸山豊先生始め副会長、其他役員の方々に寄付募金等、非常なお骨折りをおかけした。同窓会も亦、西牟田忠志会長はじめ会員の皆さんに大きな御協力をいただいた。全、四十五年は本校創立二十周年に当り、簡素な記念式典を行い、御苦労、御協力をいただいた方々に感謝の微意を表し、且つは、わが附設中学、高校の教育の充実と伸展に決意を新にした次第であった。昭和五十年は正に創立二十五周年の年であった。この年三月、附設中学校第一回生らが本校を卒業し、大学進学には一時代を画する成績を収めることが出来た。この年、久留米大学に於ては、創立五十周年記念式典を昭和五十三年度に行うことが決定され、学内全般に亘る記念事業の計画が行われた。本校は待望の図書館棟の建設を挙げて、大学五十周年記念事業の中に策定された。本校としては正に二十五周年に当つての記念事業となる次第である。この建設の資金計画には、本校父兄後援会からは、預り金制による約一億円に上る多額の資金を準備していたが、本校同窓会からも亦、二千万円の寄付募金の協力をいただいた。同窓会は本校二十五周年記念事業として募金を行った。昭和五十一年度着工、全五十二年二月、本校第二十五回生が卒業する直前に竣工落成した。この図書館棟には、図書館、視聴覚教室(一)、語学教室、英文タイプ練習室、合同大教室、技術工作教室、進路指導室、英語、数学、国語科教官研究室、面接室(三)、コンピュータ室、同窓会室等が施設されている。記念事業としてはまた、この本校創立二十五周年記念誌の編さんが行われた。この記念誌の編さんには、本校の初期から今日にいたるまで勤務しておられる世良忠彦、半田田三郎、井上敏郎、高橋謙輔の四人が編さん委員として委嘱されたが、準備期間が短かく、多忙な校務の余暇に、資料の蒐集や原稿の作成、整理、その他編集事務に極めて精力的に事業を進めていただいた。また、本校全職員の並々ならぬ協力によって本誌の完成をみる事が出来た。この記念誌は本校二十五年の歩みの記録であるが、単なる記録ではなく、実績を事績たらしめた心の記録でもあり、今後の附設高校に生きつゞけ、伸びつゞける、いのちの根となり幹となる記録となることを、これを創つて来た皆さんと共に祈つてやまない。

最後に、この二十五周年記念式典行事を行うことが、今一つ大きな意義を持っているのは、わが附設高校同窓会に於ける意義であった。元来、同窓会は、母校の慶事を機会として、これを節として成長するものであるといわれる。本校は学校移転を行った翌々年が創立二十周年であった。この年、学校移転、校舎新築を祝賀して二十周年記念式典を盛大に行うべきで

あった。この年、即ち昭和四十五年は、本校は附設中学校が創立された翌年であつて、中学・高校一貫教育の樹立に専念していた。従つて二十周年記念行事は極めて簡素に行うに止めた。これは全く学校長の不敏の致すところで、省みて誠に申し訳ないと反省している。今回、二十五周年式典行事を行うに当つて、同窓会は着々とその組織化を推進して来た。先ず会員の約半数が集つてゐる東京地域が東京支部を結成し、之に次いで大分支部、久留米支部、福岡支部と次々に組織化が進み、他の地域も支部結成の準備が進んでいる。茲に、我校同窓会は愈々積極的に組織を整備し強固にし、同窓会本来の面目、機能を發揮しようとしている。今回の行事については、自らの組織化と共に、極めて積極的、熱心に協力して、東京支部は記念特別講演会に、我国第一流の講師の先生をお迎えすることに尽力し、元東大総長、大河内一男先生をお招きすることが出来た。又、式典当日、卒業生、在校生によるシンポジウムを計画し、業種別に十一会場を設け、在校生の進路指導の為に親切を尽していた。けることは洵に喜ばしいことであり、感激のことである。我国社会の各方面に於て、母校時代に鍛えた健康体によつて、誠実・努力・責任以つて逞しい活動を続け、且つ同窓互に力になり合つていくことは、それこそ、そのまゝ、母校の榮えである。母校創立二十五周年記念祝典に当り、このことを衷心より祈つてやまない。